

北浦街道探訪記

北浦街道筋の隠れたお宝が沢山あります。地域住民でさえ日頃触れてない処があります。地域づくり部会では、まち興しの企画として「もっと知ろう・伝うよう・つながろう」をモットーに諸活動を行っていますが、お宝が陽の目を見ることができるよう北浦街道探訪記シリーズとして取り上げ「まち協ニュース」に連載しています。この度、今までの8回分について特集として、お掲載しましたのでご覧ください。



北浦街道には調べれば調べるほど沢山のお宝が発見されます。新型コロナウイルスを想定した新しい生活様式の一つとして、「温故知新」により今後を模索していただくに良い機会となればと思い、「北浦街道探訪記シリーズ」のリバイバル版を掲載することとしました。あなたの新発見はなんでしょう。ご意見・ご感想をお待ちしています。

1603年(慶長8年)徳川幕府時代の始期により、幕府は体制の維持・強化のために全国の道路網の整備をしました。これに合わせて、1605年(慶長10年)毛利藩は萩を中心に領国の周防・長門国内に藩内道路網を整備されていくこととなりました。

その一つとしての赤間関街道整備では、

- ①中道筋(萩～明木～吉田までの約50km)
 - ②北道筋(長門東深川～俵山～西市～小月までの約48km)
 - ③北浦筋(萩東田町札之辻～赤間関観音崎町までの約105km)
- の三つの幹線が設定されました。

明治維新以降は、こうした中での主要な街道は国道等に指定され舗装・拡張・付け替えが行われて現在に至っています。一方で、維持整備が出来なかった街道は廃道となり忘れられる存在になりつつあります。

北浦街道は、萩藩主の御国廻りの行事の通行路として利用されていたので街道沿線には藩主の休憩場所や宿泊施設として本陣(江戸時代以降の宿場で、大名や旗本、幕府役人、勅使、宮、門跡などの宿泊所として指定された家)や御茶屋などが置かっていました。また、北浦沿岸は低山から延びる丘陵に挟まれた地形が多く、その間に浦が点在していることから、北前船の寄港・停泊や年貢米の回漕に伴う人・物資・情報の流通路として重要でした。さらには、外国船の漂着に備える機能も備えていました。

北浦街道の略図



第1回 赤岸通り



シリーズ全4回／第1回

赤岸通りのお宝を磨き、
「まちおこし」をしよう！

平成二八年度下関市景観賞を頂いた貴
船町の「赤岸通り」にはお宝が点在してい
ます。

この地域は、旧北浦街道で明治二〇年
代以降から昭和三〇年代後半までは下関
市中心市街地として繁栄していました。
今も当時の様子が色濃く残っています。

また、現在の下関市社会福祉協議会 県
総合庁舎付近にばかりて下関市役所庁舎
があり、そこから唐戸方面に向かって約
五〇〇メートルの間に約一五〇軒の店
がひしめいていました。そこに、今でも沢
山のお宝があります。多くの人々の日
常生活の息吹が聞こえ、癒される街並と
人情には「温故知新」を感じます。
ぜひ一度、古地図を持って散策してみ
ませんか？



祝 第7回下関市景観賞受賞記念
赤岸通り探訪記

〔防火栓〕
これは、ちょっと珍しいお宝！
中を見たいものですね！

第2回 旧市役所庁舎

北浦街道探訪記

下関市役所本館（昭和三〇年二月一〇日開庁）は、日下解体され新庁舎の建設が進められていますが、それ以前は昭和二一年一二月一日より昭和三〇年二月まで赤岸通り北東、現在の社会福祉センターの一帯（下関重砲兵連隊・七四部隊跡地）に仮住居。市役所に隣接して司法書士・弁護士・市営住宅・下関商業短期大学・新聞社・援護館・済生会病院等と多くの関連施設が周辺をとりまいていました。

当時の赤岸通りの賑わいは今でも語り継がれ、名残が伺えます。ところが、昭和三七年四月に椋野トンネルが開通すると一変。車は田川沿いの県道を通るようになり、赤岸通りは幸町・奥小路・赤間・唐戸へ向かう買い物道路や散策するに相応しい遊歩道となりました。

一度まち歩きをしてみませんか？

シリーズ全4回／第2回

写真及びキャプションは「しものせきなつかしの写真集」より転載。



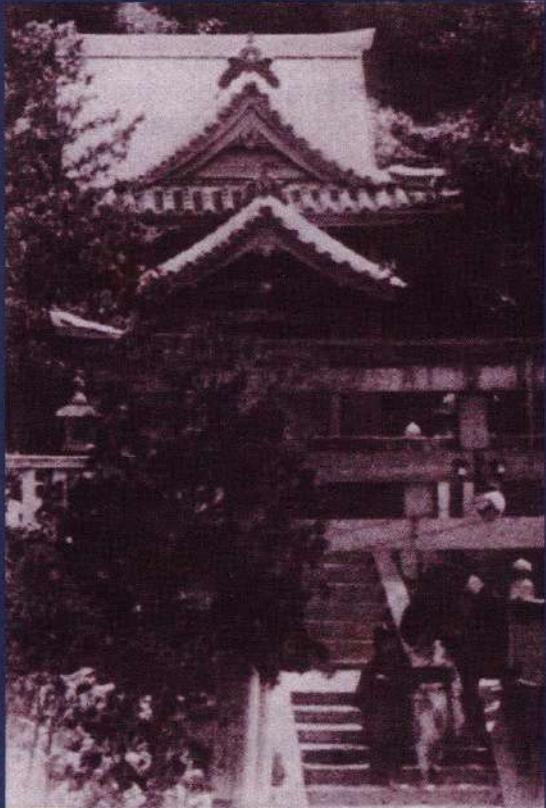
旧市役所庁舎①（昭和二〇年代）

旧市役所庁舎②（昭和二〇年代）

昭和二〇年七月一日の空襲で市販金は全焼
し、下関商工會議所は、下関商業短期大学の学舎として使われ
た。西部第七四部隊跡地へ（貴船町の現社云々）
福祉センターアリ。



第3回 末廣稻荷神社



北浦街道いまとむかし 末廣稻荷神社



●左側写真：明治末期頃の末廣稻荷神社「しものせきなつかしの写真集」より転載) ●右側写真2枚：現在の末廣稻荷神社(当協議会撮影)

西暦八〇九年(平安時代)、今の赤間町に鎮座された末廣稻荷神社。

御祭神は倉稻魂神(ウカノミタマノカミ)、穀物の豊穰をつかさどる神)です。

戦災に会い消失してしまいましたが、当時は背後

に稻荷山が控え、その広い境内には「末廣さんの桜」と親しまれた大きな桜があったようです。今ではその面影もありませんが、現在は奥小路から幸町、そして末廣稻荷の入口にある赤間町の道の両側に桜が連なり、毎年春には「桜のトンネル」として多くの人達に親しまれています。

今の末廣稻荷神社は市内の篤志家の皆様のご寄付により立派に再建され、商売繁盛・家内安全の神様として毎月一日、午前九時にお神樂が上がり地元の方々がお詣りされています。

皆様もお気軽にお参りされてみませんか。

ご存知ですか?
下関(赤間関)最古の稻荷神社
～末廣稻荷神社～



シリーズ全4回／第3回

北浦街道探訪記

中東地区まちづくり協議会 部会たより／地域づくり部会

第4回 辨天湯

北浦街道探訪記シリーズ 第4回

奇兵隊が開湯した！ロマン溢れるお宝 「辨天湯」

萩から奇兵隊の子孫が訪ねて来たと話されたのは現店主の作田賢治さん。

奇兵隊士が幕末から明治時代にかけて栄えていた稻荷街遊郭街（現在の赤間中央通界隈）での開湯なのでさぞかし繁盛したことは想像できる。辨天湯と言う命名もかつて開場していった芝居小屋「辨天座」が由来している。又、この一帯は「辨天座通り」と言われていた。

なんとも言えないロマンを感じる銭湯である。その後色々な変遷はあったものの連綿として辨天湯は引き継がれてきた。現在の銭湯（幸町）は、作田賢治さんの祖父が戦後（昭和28年頃？）前經營者から購入されたもの。賢治さんは3代目。祖父の実家は広島県福山市で木材関連の生業をされていたので、木屑（燃料）の有効活用から銭湯が浮かんだようだ。現建物は戦災後に建てられたもので、部分的には補修をされてきたが70年余経過している。下関ではかつて80軒あった銭湯も今では9軒。寂しい限りである。

辨天湯は北浦街道の貴重な「お宝」である。銭湯前には故かお地蔵様が鎮座しておられる。気になる興味深い風景である。下関幸町出身歌手「山本譲二」さんも子供の頃通った辨天湯をこれからも地域で愛し守り続けいつまでも営業を続けて銭湯文化を守って欲しいと願う。一度辨天湯を訪れませんか。きっと軟水のお湯のファンになりますよ！次回の「北浦街道探訪記」もお楽しみに！（文責・田中）

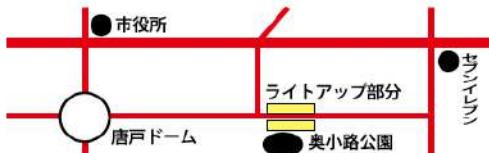


第5回 赤間中央通り・奥小路通り・幸町通り

地域づくり部会

□ 北浦街道のまち興し

- ・奥小路通りの桜並木夜桜ライトアップ
昨年に続き第2回目
3月23日(月)から点灯、4月8日(水)まで毎日18時～24時。



北浦街道探訪記シリーズ 第5回

赤間中央通り、奥小路通り、幸町通りの並木

赤間町と幸町を抜ける奥小路通りは、毎年3月末ごろ、沿道の約80本の桜が一斉に開花し「桜のトンネル」が出来上がります。知る人ぞ知る市内屈指のお花見スポットがどのようにしてできたのか。約70年間幸町で暮らしておられる豊島自治連合会長さんによると、幸町の桜が植えられたのは今から29年前の平成3年とのこと。実はこの地域一帯には養治小学校がある山側から流れてくる山水が

一方で赤間町側は幸町とは異なり昭和20年頃に「ふくの・なかを本店」さんが山桜を持ってきて店の周辺に植えたことがきっかけかけとなつて、徐々に桜並木ができるがつたそうです。枯れた際に植え替えもなされており、少し木は小さめですが、毎年美しい花を咲かせ通る人を癒してくれます。桜の花が散った4月～6月にかけては深緑・新緑葉のトンネル、さらに11月半ばから12月には紅葉のトンネルも楽しめます。桜並木は下関市公園緑地課が管理しているほか、散った花びらや落ち葉は沿道周辺のみなさまが毎日のように清掃してくださいされており、年に数回は、まちづくり協議会も参加しています。

地域みんなで守り育ててきた桜並木を、中東地区の自慢のスポットとしてたくさんの方に楽しんでほしいものです。



第6回 山の口町縦貫道市道の開通

北浦街道探訪記シリーズ 第6回

山の口町縦貫道市道の開通

今から百二十三年前（明治二十年）唐戸周辺の埋立てが完了した。その頃山陰路（北浦街道）と市街地を結ぶ公道は、幡生町（石神町）→一里山（大平山）→赤岸通りだけであつた。しかし、大平山の西麓高台の急坂道は超難所として新道の建設が渴望されていた。本縦貫道は、石神町に通ずる峠道を大堀削して明治三十七年六月に五十四件の寄付者により開通した。ここに建つ市道竣工記念碑はその当時の地域の町内（十九件一千六百万円）・個人（三十四件六百万円）・山の口（灌池所有者より五十六坪。合計五十四件の三千一百万円（現在貨幣価値換算推測）と切望と熱意溢れる寄付があつた証として今に伝えている。

碑は前大田酒店・前中川米穀店・前坂根呂服店前に位置しており、山の口町の歴史の象徴として後世にも伝承すべき出来事として残っている。今は、周辺を花壇として町内の皆さんが四季を通じて手入れをされていることからも当時の喜びの思いが現在までも継承されている。それまでは袋小路であった山の口町は山陰幹線要路して以降飛躍的に発展をしてきた。

こうした縦貫道開通に至る背景には、明治二十年から二十三年十二月には、山の口町・貴船町・上田中町周辺一帯に下関重砲兵連隊が設置され軍の諸施設が建設されはじめた。明治二十二年には、東駅（西の端）の県道が大改修され新道路となつた。明治二十八年には山の口町の前下関税務署と甲斐弁護士宅敷地に（現在は、アーテント山の口マンション）下関要塞司令部が設置された。その後、明治二十七年（一九〇四年）にかけて田中川河口の埋立てがなされ唐戸湾が現在の唐戸として栄えていった。故に本縦貫道の存在が如何に重要なことを物語ついてゐる。（山の口町中川米穀店様及び中村自治会長様のご協力により記事作成・山縣邦光記）



第7回 裁判所の門の面影

北浦街道探訪記シリーズ 第7回

今も残る百三十年余前の裁判所の門の面影

北浦街道筋の貴船町には明治維新後、行政機関も数多くできた。その一つが裁判所である。明治九年（一八七六年）から城山（今の下関市役所付近）にあった赤間関区裁判所庁舎が、明治二十年四月には、現山口県総合庁舎地に新庁舎を建設し移転した。写真のような威風堂々の建物が完成した。それから時を経て昭和三十三年、現在の裁判所（上田中町）へ移転するまでの七十二年間は貴船町で業務が進められていた。裁判所周辺には弁護士、司法書士などの事務所が多く集まり町は繁栄していた。その名残は今でも散見される。また、下関は大陸との玄関口でもあったことから明治・大正・昭和の名時代を通じて栄え続けていた。特に貴船町周辺一帯には陸軍要塞司令部、下関重砲兵連隊も設置され、西日本の国防上要塞地帯として重要視されてきた。

裁判所の話を戻そう。昭和三十三年には裁判所の移転に伴ない、前述の明治二十年に完成した裁判所は解体されることになった。写真の大きい建物の前にちょこんとした建物が見える。裁判所の玄関の車回しの屋根だったそうだ。興味深い話がある。この建物が今も現存していることにビックリだ。この地に裁判所があったと言う事実が一層鮮明に蘇ってくる。それは、下関市みもすそ川町二三十一五「旅館・料亭のみもすそ川別邸」の正門入口に堂々たる構えで残っている。

現女将の西山玲子氏の話によると、創業者の西山音治さん（玲子氏の祖父）がこの門を譲り受けられたそうだ。そもそも裁判所は明治天皇の勅令により設置されたことから、瓦一つ一つに菊の御紋が刻まれており、解体処分され海中に投棄されるのが忍びなくてという思いがあつたのではないかと。西山音治さんは、明治三十七年の日露戦争に出兵されており、菊の御紋の威光を身に染みて分かっておられたからとも言っていた。一度みもすそ川別邸を訪れて古を偲んでみてはいかがか。きっと新発見されるとと思う。（山縣邦光記）



旧裁判所



移築された門
(みもすそ川別邸入口)



瓦の菊の御紋



現在の山口県総合庁舎の遠景

第8回 早鞆高等学校のルーツ

北浦街道探訪記シリーズ 第8回

早鞆高等学校のルーツは貴船町にあった

上田中町の早鞆高等学校は、生徒・教職員千名余、8学科と今や県下でも有数の私学の高校で、百一十年の歴史を刻んでいます。そのルーツは北浦街道筋の貴船町の通称「桃ヶ丘・吉見山（現貴船一丁目・山口合同ガス本社の上辺り）で産声を上げた。

明治34年（1901）教育者の阿部ヤス先生が教師の傍ら、自宅で家塾を興す。教えを乞う子女が増え続け、華道・茶道・裁縫と巾広く指導。郷里から母親を呼び寄せ教導したこと。家塾を始めて10年後の明治44年（1911）高等学校教諭を退職、翌年の明治45年（1912）山口県知事へ繰り返し申請していた学校創設が認可され、「下関阿部裁縫女学校」の開校が実現。

その後、大正13年（1924）「下関阿部高等技艺女学校」と改称。昭和20年（1945）の下関空襲で桃ヶ丘の校舎は焼失したが、養治小学校、貴船町の陸軍の馬小屋を借りて授業を続けた。昭和21年（1946）「早鞆高等女学校」と改称。昭和23年（1948）「財団法人早鞆学園」を設立、「早鞆高等学校」を設置。その後、昭和25年（1950）に現在地に校舎着手。昭和26年（1951）「学校法人早鞆学園」を設立。併せて「早鞆高等男子部」を創設し、現在の隆々たる学校に繋がっていると早鞆高校百年史に記載されている。

創設当初の貴船町桃ヶ丘での学校跡地と周辺は、市営住宅となり現在では住宅地となっているが、当時の学校正門に繋がる階段は今も当時の面影を残している。（下記写真参照）

私たちが生活している地域では時が経つにつれ、とかく「そもそも」「最初に井戸を掘った先人の偉業」を忘れるがちになる。時折先人達の意とするルーツに触れる機会を持つことが、将来を生きる私たちに一筋の光明になるかも知れない。これぞ温故知新です。機会があれば古を偲び貴船町桃ヶ丘を訪れてみませんか。早鞆高等学校は長い歴史の中で、著名な方を輩出されており、これからも一層発展されることでしょう。



阿部ヤス先生

〔引用資料：早鞆百年史・下関市立中央図書館に置いてあります。関心をお持ちの方は図書館に行つて下さい〕



桃ヶ丘の校舎（大正15年増築落成）



レンガ造りの階段も↑

↑正門に繋がる階段・石造

現在の早鞆高等学校→

